

大方美香先生 連続研修会
「エピソード記録とそのカンファレンスについて」を実施しました

平成25年9月9日、20日と連続研修会「エピソード記録とそのカンファレンスについて」を実施し、大阪総合保育大学大学院教授大方美香先生に指導いただきました。短期間の集中研修だったこともあり、参加された園にとっても学びの多い、実りの多い充実した内容になりました。

記録の書き方

<意識化して記録を書いてみる>

- ◎小さなことでも書くことで意識する。
- 気づく⇒無意識⇒意識化（焦点化、視点をもつ）⇒文字化（記録化）⇒気づく。**記録をとることで気づきがでてくる。
- ◎記録をすることで後の振り返りになる。
- ◎書き方、着眼点はそれぞれ違う⇒保育力、何をしようとするかでエピソードが違ってくる。
- ◎読み返した時に、もしこの時この言葉をかけていなかったらどうなっていたか？この言葉をかけてよかったのか？保育士の言葉のなげかけでその後の反応が違ってくる。
- ◎書いて終わりではない⇒次から意識する。

<記録の書き方>

- ①その時の状況を書く。
- ②子どもの言葉を書く。
- ③保育士の声かけを書く。
- ④子どもの気づきや育ちは、振り返って感

じたことをそのまま書いてみる。

- ⑤書いただけにならないように保育士のかかわりを振り返る。

<書くときに気をつけること>

- ◎書き方を統一する。（子どもの名前前の表記の仕方、会話は「 」で囲むなど）
- ◎書くときに、会話の部分をつけて書くとい。（あとで見た時にわかりやすい）
- ◎事実と保育士の思いを分けて書く工夫をする。（横に書くなど）
- ◎適当に創作するのではなく、事実だけを書く。
- ◎事実（根拠）に基づいて保育者の思いや役割を書く。
- ◎何かまとめて結論を出そうとしない。

<いろいろな記録の方法>

- ◎エピソードを図式化すると新たな姿が見えてくる。
- ◎人間関係を図にしてみるのもよい…言

無意識⇒意識化する
保育を書いてみることで意識

葉のやりとりがよくわかる、声かけしすぎ？

- ◎可視化できるように…毎日忙しいので忘れないように記入する。

◎ノートに字の大きさや色を変えるなど工夫して書く。

◎今日怒った、注意した、叱った、抱っこした子⇒すぐに付箋に書いて壁に貼る。先生によりマジックや付箋の色を変えるなど工夫する。

（今は豊富な文具がいっぱいあるので）

- ◎連絡帳…付箋などつけてわかりやすく！…特別な日（歩いた日、よくしゃべった日等）

いろいろな
カンファレンスの方法書くだけで終わらず…
保育士同士でカンファレンスをする事で振り返る

<付箋を使ってグループワーク>

- 9月9日は、4グループ（5~6人ずつ）に分かれ、事例の記録について付箋を使ったカンファレンスの方法（KJ法）でグループワークをしました。
- ①付箋に自分の意見を書き、順番に意見を言いながら大きな紙に貼っていく。
- ②他の人と同じ意見の場合は、同じところに貼っていく。
- ③他の人の意見を否定しないで、どんどん意見を出していく。



- ④リーダーが出た意見をまとめていく。
- 付箋には…
- ◎よいと感じた点、よ

くわかった点などを書く。

- ◎もう少し知りたいと感じたこと、課題と感じたところなどを書く。

<各園、クラスごとに
意見交換>

- 9月20日には、各園ごとの記録を見ながら全員でカンファレンスし、大方先生に指導をしていただきました。大方先生にカンファレンスをしていただくことで、保育のねらいや子どもの発達、育ち、課題がよく見えました。やはり、記録を書くときと同様、読み取る上でもその「視点」が重要であることを感じました。
- ◎書くだけでなくみんなで話しあうことが大切！…1分でも3分でも5分でもいい。同じクラスの担任間で。
- ◎書きっぱなしで終わらないためにも

カンファレンスは必要。

<カンファレンスの効果>

- ◎付箋に書くことで言語化⇒可視化できる。
- ◎決めつけていないか？この対応でよかったか？保育士の役割はどうだったか？様々な視点で振り返ることができる。
- ◎できることから始めていくことで、意識を変えることができる。
- ◎人の話を聞くことが大切⇒プラス思考でよいことが言い合えるように、気づき合えるように。
- ◎先輩後輩それぞれの見え方がある。それぞれの見え方をカンファレンスを通じて共有することが、保育の資の向上につながる。

大方先生のカンファレンスから学んだこと

<乳児での途中入所を考える>

◎新入児が入る事で、不安定になる在園児もおり、気持ちを受け止めることが大切なことをわかってはいても、新入児の心のケアを優先してしまいがちである。しかし、在園児の方をしっかりと受け止めることが大切。

◎同じ年齢でも保育経験で差がある。

◎1歳という年齢は、本来、友達に気を使っている時期ではない。（泣いている友達におもちゃを渡した記述より）
まだまだ、「甘えていい…遊んでいい…」年齢。

※早くにしっかりとさせる必要はない。

<保育の中での食べること>

◎幼児教育における食育とは…食を通して何を学んだか？どれだけ興味や関心が持てるかが大切である。

◎食べ切ることにはこだわりのではなく、「おいしかった」ことを広げる。食への

関心を深めるチャンス。

◎食べ切ること＝結果を重視しすぎると、本来大切にすべきことが見えなくなり、子どもの中に結果によって優劣をつけることを植え付けてしまいかねないので気をつける必要がある。

<幼児保育で大切にしたいこと>

◎散歩＝順番に並ぶ、追い越してはダメ…となると散歩のよさがいかせない。いろいろ歩くのもよい。

◎異年齢の良さ。年上のまねをして育っていく。生活のなかで学んでいく。

◎リベンジする力が弱くなっている。やり直す力を育てる。

◎失敗する、あきらめる…ことも経験することが大事。

◎3歳の発達…体験を別のもので見立てる。

◎4歳は経験を意識できる年齢。

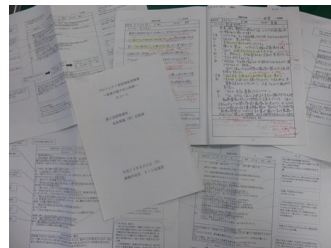
◎子どもの気付きを集団の中で伝える。きっかけをつなげることにより、遊びが深まっていく。

<保護者への可視化

子どもへの可視化>

◎気づき、成長…できるだけ具体的に書くことで、遊んでいるだけでなく、たくさん経験や学習がたまっていることを親に伝えていくことが大切。

◎保育士は、みんなの前で伝え、他児へ広がる仲立ちをする。小さな経験がみんなの共有体験になるように。



<乳児保育で大切にしたいこと>

◎乳児には、言葉だけではわかりにくい。わかりやすく、伝えることが必要。

◎2歳児の世界

・2歳児の世界のおもしろさは、アニメズム。概念がまだ育っていないから、体験を表現していく時期。

・身近な体験からやりとりができたり、言葉が出てくる。

・言葉のやりとりや体験からイメージし、表現して見立てあそびをするようになり、さらにごっこあそびへと発展していく。

・見立てあそびからごっこあそびへは、社会性が必要。

◎子どもの言葉を保育士が反復することが大事。その繰り返しで、言葉を獲得していく。イメージする力がつく。会話する力に

つながっていく。

◎保育士が子どもの気持ちを言葉に変えていくことが大切。

◎様々な人と出会ったりいろんな場面を経験させる。

◎意味をもったトラブルはよいが、欲求不満のトラブルはよくない。この子は何を求めているのかを考える。

◎おもちゃの数は十分か、一人ひとりが安心して自分のおもちゃとして遊べる環境か考える。

◎小さな場面を深くみるのが大切である。

◎同じ場面でもその子どもの年齢の発達によって、保育士のとらえ方やかわりを変える必要がある。

【事例】

おもちゃの取り合いの場で…

A君：2歳3か月⇒ただ欲しいから

B君：3歳3か月⇒「ぼくの」ものだから欲しい

◎A君への対応：「ほしかったんだね」とA君の思いを保育士が言葉にする。別の同じおもちゃを渡すことで納得もできる。

◎B君への対応：人のものと自分のものとの区別がついてくる時期。「ぼくの」という自我が芽生えてきている。同じおもちゃでも代替えはきかない。保育士は、ぼくのだからほしかった気持ちを受け止め、「A君もほしかったんだって」と相手の気持ちも伝える。

保育の中ではよくある場面…子どもの年齢や発達をとらえて保育することが重要。

「プロジェクト型保育」

ルンビニ保育園において北野幸子先生の指導による園見学・コース研修会を実施しました

台風のため延期になっておりましたルンビニ保育園の園見学と指導を11月14日（木）に実施することができました。午前、ルンビニ保育園において神戸大学大学院准教授北野幸子先生に園見学と指導をしていただき、その中で保育課程や指導計画についても詳しく指導いただき、改めてその重要性や見直しが必要であることに気づくことができました。

保育課程は子どもへの約束

保育指針を元に計画をたて、行事だけでなく、どういう子どもを育てたいかを大切に書く記録をとることで保育の振り返りができ、課題が見えてくる

◎年間計画を貼り出していることはとてもよい。

◎記録をとることで保育の振り返りができ、課題が見えてくる。

◎園長(総括)⇒主任(取りまとめ)⇒担任(子どもの姿、今までのデータを元に計画をたてる)

◎園内研修をし、皆で保育を見直していく。

◎保育課程の見直しシステム→現代の子どもと、昔の子どもでは自然・生活環境、運動や遊びも違う。

◎メディアも良い点・悪い点を考慮し、良い点を使い、新しく取り入れていく。

◎評価の観点

計画の段階で、子どもの評価の観点をイメージする。

・保育士の評価

・子どもの評価

◎ねらいを達成したら、子どもの言葉や行動にどんな変化が見られたか？

・〇〇ができるようになった

・どんな気持ちがあったか

・感情の影響

◎子どもの興味・関心で月案を変えていく。(エマージェント・カリキュラム＝臨機応変に変化・アレンジさせていくカリキュラム)

ルンビニ保育園見学

保育の中に、子どもが自分で選び、決め、考えることができる余地をどれだけ取り入れられるかが大切
保育のねらい、環境設定は子どもの姿から出てくる

<5歳児 芋掘りでの芋づるを使っての
クリスマスリース製作>

- ◎芋づるのリースは、つるを巻く時に力もいるので手の操作性の発達によい。
- ◎リースに自然物（自分達で拾ったドングリ、マツボックリ等）をどれだけつけるか、何をを使うか（リボン、モールなどの素材）子ども自身が決めることでそれぞれ違った形や大きさで個性が出ていてよい。
- ◎子どもの意思、選択、活動がリンクするようにするとよい。



<2歳児 自然物を使ってのままごと>

- ◎自然物と素材使用しているもの（のカラーがマッチしてよかった。
- ◎自分達で拾ったドングリやマツボックリ等、今までの遊びの経験が、環境設営の中に入っていた。
- ◎言葉の獲得は生活体験から家庭（今までの生活・現実・人）での経験が遊びの中に出てきて、保育士との言葉のやりとりや友達とかかわる中で言葉の獲得につながっていく。この時期の見立て遊びは大切。



<階段下の調べもの・科学のコーナー>

◎地球儀・天秤・自然の本など、子どもがすぐに調べたり、考えられる科学のコーナーが身近にあることはとてもよい。図鑑があればさらによい。

◎子どもがひとつのことに没頭し、考える時間があると力がつき、伸びていく。



◎子どもが疑問に思ったことを自分で見つけ、調べたことは、覚えることができ、知識になる。その中で、保育士が助言やアドバイスをすることで知性や信頼感につながっていく。
◎幼児期にこのような体験をどれだけしているかが大切。

<園庭>

- ◎木がたくさんあり、畑も子どもの身近にあってよい。
- ◎菜園活動には協同的学びがある。5歳児は、何をつくりたいか？何人ずつ？等、子ども同士で決めさせ、進めていくことで成長、収穫の喜びも大きい。その中で子どもの姿をドキュメンテーションに書き、食育が家庭に返っていくようにする。
- ◎遊具はありすぎず、子どもが自分の身体でコントロールできるものがよい。
- ◎園庭は、サークルを描けるような子どもが走り回れる空間の動線が大事。
- ◎毎朝、ランニングをしている。⇒子ども達にランニングコースを決めさせる、運動用具を設定させることで楽しい⇒やる気が出る⇒明日もしたいと思えるようになる。



<給食室>

- ◎調理室が子どもの目線で見え、とてもよい。
- ◎給食の調理員・栄養士・用務員も子どもにとって人的資源であり、どのように保育の中で機能できるかが大切。
- ◎保育課程、カリキュラムを保育士だけでなく園全体で共有し、理解しているかが大事。全職員が子どもの声を聞けるようになると園全体の保育も変わっていく。

プロジェクト型保育研修

午後は、ルンビニ保育園、東山保育園、中保育所の「ドキュメンテーション」を見ながら意見交換やグループディスカッションを実施し、指導を受けました。また、実際のプロジェクト型保育の映像を見て学び合うこともできました。

グループディスカッション Aグループ 事例：中保育所 5歳児 ハロウィンパーティー

<各園・個人からの意見、感想、課題など>

- ◎子どもの会話がもっとあればよい。
- ◎順を追って、時系列的に子どもの姿が拾ってあり、見た目もわかりやすいドキュメンテーションで子どもの声がよく拾えている。
- ◎保護者が一番知りたいのは結果ではなく、子どもの会話や子どもの姿であると思う。子どもの気づきから考察につなげていくには、保育士が保育所保育指針を押さえたいうえで、保育のねらいや内容を考える必要がある。
- ◎ドキュメンテーションに子どもの会話、保育士



の考察を色分けして書くと保護者にもわかりやすく、選択できるので、“読もう”と思えるのではないかな？

- ◎子どもが、こんなふうに、こんなことをして、楽しんでいたら具体的に伝える必要がある。
- ◎ドキュメンテーションに子どもの会話やその時遊んでいる様子の写真があることで、保護者に言葉だけでは伝わらない保育園での子どもの姿がより伝わる。

<中保育所より>

- ◎子どもが楽しさを友達と共有したいと思っていること、“やりたい！”と思った時に出す力で、遊びが深まることがわかった。
- ◎保育士主導の保育よりも、柔軟に保育することで子どもの潜在能力が見えるようになった。

グループディスカッション Bグループ

事例：ルンビニ保育園 2歳児 さつまいも堀り

<各園・個人からの意見、感想、課題など>

◎活動のねらいがカードに書いてあることでとてもわかりやすく、担任の思いがよく伝わってきた。

◎大きくドキュメンテーションのトピックスが書いてあると活動の内容がよくつかめるのでよい。

◎このドキュメンテーションでは、ねらいを元に活動の内容が書かれているので、どのように活動が進んでいったのかがよくわかる。



◎保護者に、保育には“ねらい”があって、“活動”があるという流れがよくわかる。

◎保育士が今までの子どもの経験や姿をよく見取っていて、子どもが興味を持ったことを活動の内容にされ

ているのがよくわかる。

◎ドキュメンテーションを客観的に見てもらうことで、新たな気づきがあり、保護者だけでなく、保育者同士の学びあいにつながると思う。

◎この活動から、食の循環について伝えていくことを取り入れてもよかったのでは？

<ルンビニ保育園より>

◎担任が活動のねらいを保護者に伝えたいという思いがあったので、ねらいをカードに書いてわかりやすくした。

◎家庭で食についての経験が少なくなってきたので、活動を通して調理の先生から皮の剥き方や作り方を教えてもらう機会になるよう工夫した。



～北野先生より～

「結果」を伝える「ドキュメント（記録）」ではなく
「プロセス（過程）」を伝えるドキュメンテーションを！

◎行為の事実

- ・何を見つけてどうしたか
- ・〇〇をしていた
- ・〇〇を何個作っていた 等

◎発言の事実

- ・どんな会話をしていたか
- ・どんな意見が出ていたか
- ・1つか2つ会話の内容

◎表情の事実

- ・にこにこした笑顔で
- ・嬉しそうな顔で 等

◎子どもの主体性を尊重し、主体的に遊んでいた様子を書く。



◎読み手を配慮して活字を書きすぎない方がよい。

◎子どもの姿から、保育士がなぜそのように思い、感じたのかを書く。

◎子どもが見ている目線の先にあるものは何か

- ・こんなことができる
- ・こんなことを感じている
- ・こんなことに気づいている
- ・こんなことがわかっている

◎個人の力⇒園の力⇒地域の力となり、次世代育成につながる

◎保護者への支援として～親が持っている子どもの発達の意識が低い場合、気づいていない。わかってもらえていない。保護者の子どもの発達に対する意識を高めるためにも伝えていく。

現地研修として

鳴門教育大学附属幼稚園 幼児教育研究会へ参加しました

平成25年11月16日（土）プロジェクト型保育推進事業現地研修として、鳴門教育大学附属幼稚園幼児教育研究会に参加しました。当日は、早朝の出発にもかかわらず、たくさんの方に参加していただき、大変有意義な1日となりました。

午前には、保育と幼少連携合同授業の公開を見学し、午後からは、「幼小接続」「遊誘財」のそれぞれの分科会にわかれ、学びを深めることができました。

全体会においては、附属幼稚園教頭 佐々木 晃先生による研究発表や、文部科学省初等中等教育局幼児教育課教育調査官 津金 美智子先生による講演『遊びの中にある学びを考える』を受け、改めて幼児教育の基本といえる「遊び」や「環境」について学ぶ機会になりました。

【参加園】岡田保育園 平保育園 タンポポハウス 東山保育園 八雲保育園 やまもも保育園
ルンビニ保育園 中保育所 東保育所 西乳児保育所 南乳児保育所 東乳児保育所



津金先生 講演より

<遊びの中の学びとは>

◎遊びや生活の中で、くり返しいろいろなことを体験し、その過程を楽しみ、過程を通して人とかかわる中に幼児の学びがある。

<遊びの中の学びを育むには>

◎環境の中に「教育的価値」を含ませながら、幼児が自ら興味、関心を持って環境にかかわり、試行錯誤を経て、環境へのかかわり方を身につけていくことを意図した教育。「環境を通して行う教育」は幼児教育の基本である。

◎活動の主体は幼児であり、保育者は活動が生まれやすく、展開しやすいように意図をもって環境を構成していく。

◎「幼児の主体性」と「保育者の意図」をうまくからませていく⇒発達に必要な体験として。

◎環境を構成するとは…物的環境、人的環境、自然環境、社会事象、空間的条件、時間的条件を相互に関連させながら、幼児が主体的に活動し、発達に必要な経験を積んでいけるような状況を作り出すこと。

◎幼児の活動に沿って、幼児が実現したいことをとらえ、思いやイメージを生かしながら環境を構成すること。

<幼児期から児童期へ学びを

つなげるためには…>

◎幼児期には、「学びの芽生え」から「自覚的な学び」へ意識できるような活動を計画することが必要。

◎「学びの芽生え」から「自覚的な学び」への円滑な移行を図る教育活動は、発達段階を考慮して、人・もののかかわりの中で行う必要がある

◎「言葉や表現」を通じて人とのかかわりを行うことで、気づきや思考を深めようとする活動が展開されるよう、留意することが必要。

分科会 ① 幼小接続

～木下先生より～

子ども自身が自己発揮できる活動だった まさに、学力＝楽力！



<合同授業>

◎牛乳パック
上手いかな
い⇒くやしい
→どうしたら
いいんだろう
⇒答えを出す

のでなく、大人と一緒に見守る⇒自分たち
でできた⇒達成感につながる。

◎リレー

「勝つにはどうしたらいいの？」いつも
は答えを出させようと声かけするが、子
ども自身が「なぜはやいのか？うまいのか？
ずるしていないか？など…」見て気づいて
いた。

<小学校・担任より>

◎小学生は幼児より、賢くてよい所を見せ
られるのが接続の醍醐味だと思っていた。
⇒そうではなく、いつも通りでよい。

<幼稚園・担任より>

◎子どもの表情や活発さが保育者の活動
のバロメーターとなっている。
◎子どもの味方になることで豊かな活動
になる。

◎大人も楽しいと思えないと連携はダメ
だと感じた。

<助言：奈良教育大学

准教授 堀越紀香先生より>

◎上手いできないことから、子ども自身
が気づいている。

◎子どもは大人の予想以上に多くのこと
を経験している。→それを子どもは喜び
と感じている。

◎体験と環境を通して学習する喜び、楽
しさに出会っている。

◎両担任の先生が、子どもの学びを共有
している。

◎エピソード記録を使った指導案がうま
くマッチした。子どものためのカリキュ
ラムを作ることが大切。

<助言：鳴門教育大学大学院教授
木下光二先生より>

◎この日の活動は楽しいものだったので
『楽力』だ。

◎時間と空間の枠を取り払うことが大
事。

◎保育者が自己発揮できなければ、子
どもも自己発揮できない。→この日の
活動は幼児が自己発揮できていた。

◎「ダメだよ」という否定的な声を出
す必要のない交流や活動ができたこと
がよかった。

◎幼・小の子どもたちが、お互いに興
味・関心を持
ち、活動が充
実していきな
いと交流は楽
しめない。



分科会 ② 遊誘財



<助言：京都教育大学

准教授 古賀松香先生より>

◎子ども達は“何かになる”と言う事を通
して、そのものをつかんでいく。

◎身におこったことを自分におきかえて、
体感的に了解していくことが科学的思考。

◎子どもが環境に出会った時、どのように
接し何を得ているのか、ていねいに感じ取
ることは園の質の高さにつながる。

◎言葉で表せない体感したことを、友だち
と一緒に受け止め、通じ合う姿をそ
ばにいる大人がていねいに見取ろうとする
事が大切。⇒プロセスへの注目

～佐々木先生より～

幼児教育は環境を通して行われる 環境は最善でなくてはならない

<助言：鳴門教育大学大学院

名誉教授 佐々木宏子先生>

◎幼児教育は環境を通して行われる。附
属幼稚園では、長い時間をかけて子ども
にとって最善の環境『遊誘財』＝「砂・
土・泥・水など」「植物」「動物」「造
形遊具、玩具、教材など」「表現文化」
「生活文化」を整えてきた。

◎こうした保育環境インフラは、長い歴
史の中で、子どもが愛着を示し、遊び込
むことで維持され、保育者が意図的に支
えてきたもの。

◎「箱物+保育者」では保育は成立しな
い。

◎すぐれた環境＝情報がたくさん。自然
には情報がたくさんつまっている。

◎自然環境インフラとは、その中にお
かれた時、子どもが自分で引き出してい
くもの。それが「遊誘財」。

◎子どもが遊ぶためには、何が**必要か考
え抜かれて設定されなければならない。**

◎直接的に保育者が何かを言うのが保育

ではない。すぐれた環境を通して保育者
と子どもがつながっていく。

◎大・小の概念について…経験の量が多
く、質がよいほど、活動を通してスケ
ールが大きくなっていく。教科書だけ
では形成できない。経験が重要。

【例】「大きい」という概念にもいろ
いろある。量的な大きさもあれば、見た
目の大きさもある。「あの人は器の大
きい人だ」というような抽象的な表現
もある。

◎何かに“なりきって”あそぶのはフ
ァンタジーの典型だとは言い切れない。

◎子どもの科学的思考が上れば、フ
ァンタジー

(空想的思
考)は壮大
なものに
なってい
く。



鳴門教育大学附属幼稚園の室内環境の一部を紹介します。

どのクラスにも、秋の自然物や道具類が置いてあり、子どもがいつでもふれられるようになって
います。子ども達が作ったものもたくさん掲示してありました。

